

## 『浅茅が露』作者考：藤原為家作者説の可能性

辛島，正雄  
九州大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/11935>

---

出版情報：語文研究. 66/67, pp.83-91, 1989-06-10. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 『浅茅が露』作者考

——藤原為家作者説の可能性——

辛 島 正 雄

## 一 はじめに

先に筆者は、鎌倉時代物語『浅茅が露』の作者について、その作風からして男性の手になるものであろうこと、そして、『風葉和歌集』への入集状況の特異さから推すと、その人物には、同集の最終撰者であった藤原為家が擬せられるのではないかと、という仮説を提示してみた(拙稿『浅茅が露』作者考・序章——藤原為家作者説の仮設——『言語文研究』61号 一九八六年六月)。本稿では、その後をうけて、具体的に為家執筆の可能性を探ってゆくことにしたい。

## 二 為家と物語

俊成——定家——為家と続く重代の和歌の家にあつて、俊成・定家と物語との関わりの深さについては、これまでもしばしば論じられてきた。しかし、為家と物語との関係ということになると、必ずしも十分な考究の手は伸びていないようである。ただ、おそらくは、かれの父定家が若き日に見せた物語への熱烈な傾斜のごときものは、経験しなかつたかと思われる。

その為家の青年期については、佐藤恒雄氏に詳細な論考がある。<sup>①</sup>いま、氏の調査につけば、貞応二年(一二三三)八月、二十六歳にして、父に歌道不堪をもって嘆かせている自らの低迷状況を打破すべく詠まれた『千首』中に、「物語類の影響を受けている」と思しい歌若干<sup>②</sup>の存在が、指摘される。もっとも、それも、

『千首』において、最も特徴的なのは、夥しく先行作品を摂取した跡をとどめていることである。(中略)千首もの大量の歌を速詠することは、たとえ巳達の歌人であっても容易なことではなかつたはずで、まして二十六歳の未練の歌人為家にとつては、その目標をどこに置くにせよ、大きな困難を伴つた試みだつたにちがいない。そしておそらく、その困難の最たるものは、表現など技巧上の問題よりも、むしろ語彙そのものの貧困の点にあつたものと思われる。そこに夥しい先行歌が顧みられる必然性が存したのであるうし、また、先に述べた如く珍しい素材やことばを開拓しようとしたことも、一つにはやはりその点に由来していたにちがいないのである。<sup>③</sup>

という『千首』全体の性格の中では、結局、そこでの物語等からの

影響なるものも、これまた同氏によれば、「総じて物語類からの影響はさして多いとはいえない」のであり、

しかし、既にこのころの為家が、『狭衣』『更級』『伊勢』『源氏』などの古典を学びはじめていたことは確かであり、その意味で一顧の価値はある。

という程度の意義が認められるに過ぎなかったのである。しかしながら、そうした物語類への親昵の開始は遅れるとしても、努力家肌のかれが、後年一日一首を心がけたごとく、物語類をも地道に学ぼうとしたとすれば、ほどなく相当の力量を備えるに至ったであろうことも、想像にかたくない。

さて、それより十年遅れて、天福元年（一二三三）春の頃、「絵づくの貝おほひ」（『古今著聞集』巻十一・画図第十六）が催された。この折の物語絵のことについては、寺本直彦氏の論考<sup>6</sup>に詳しいが、その物語絵の企画者が定家であり、為家はか御子左家一門がそれに協力したものと推定されている。そして、『明月記』同年（改元前で貞永二年）三月十八日の条に、

金吾（為家のこと——筆者注）服葉之間在此宅。物語絵月次事評定。闕月今日求出之間、及曉鐘不覺寤廬<sup>7</sup>。

と記されているのなどを見ると、為家がすでに父の片腕として立派に相談役となっているさまが窺えるようである。当代随一の物語の権威である定家に認められていることは、為家がこの方面でも頂点に立ちつつあったことをものごたろう。

また、伊井春樹氏によれば、『源氏物語』の注釈史上、鎌倉期、「為家の周辺では数多くの秘説が発生していた形跡がある」ともいう。『弘安源氏論義』において、「源氏のひじり」として自他ともに許し

ていた飛鳥井雅有が、文永六年（一二六九）二十九歳の折、嵯峨の山荘に阿仏尼とともに隠棲する七十二歳の老大家為家のもとに、『源氏物語』全編の講釈を聴聞に訪れていることは、その著『嵯峨のかよひ』によってよく知られているが、その末尾に雅有は、

これほど我国の才学ある人はあらじとおぼゆ<sup>10</sup>との感想を記している。そして、これより二年後、文永八年には、大宮院より委嘱された『風葉和歌集』の撰修を完了させていることは、いうまでもない。

こうして、ごくあらあらとながめるだけでも、重代の和歌の家を継ぐ者として、為家が父祖の築き上げた物語との深い関係を持続させていたことは、疑いを容れない。ただ、多少気になることがあるとすれば、佐藤氏が『千首』中の物語撰取歌について、

所詮、俊成が完成したような物語の世界そのものを取りいれるゆき方には程遠い。場面全体、地の文のことばなどをとり用いるのではなく、歌の詞を主として撰取しているのであって、その意味では、物語撰取というより古歌撰取に近いといつてよいであろう<sup>11</sup>。

とされる点である。これは、必ずしも青年期の習作ゆえと一概にいいない面があるようで、物語の世界を貪欲に撰り込むことで歌境を拡げようとする態度は、歌人為家にあつては、さまで切実には問題にされなかつたもののようである。

このようにして見てくると、為家に物語についての深い造詣があることは問題なく認められるとしても、かれに父定家のごとき、物語の創作にまで手を染める熱意があつたものかどうかは、多分に懐疑的にならざるをえないだろう。しかしながら、物語執筆の契機な

どというものは、本業の歌の舞台とは異なり、書かないなら書かないですむものだとしても、事と次第によっては、案外容易にその機会は訪れうるのではあるまいか。したがって、定家のごとき条件を整わぬからといって、たちまちに為家の物語執筆の可能性を否定してしまふ必要もあるまい。潜在的に、為家には、物語創作の能力が十分にありそうなのだから——。そこで、以下に、為家の経歴と『浅茅が露』の作品内容との間に、何らかの接点のようなものがないか、見てゆきたいと思う。

### 三 『浅茅が露』の大納言典侍と後嵯峨院大納言典侍

物語『浅茅が露』は、すでに故人となつてはいるかつての愛妾大納言典侍を追慕する帝の姿を描く場面から幕を開け、以下、その大納言典侍が源中将との間にもうけたヒロインと、二位・三位という、従兄弟どうしの関係にある二人の中將とを中心人物として、綾なされてゆく。

ところで、この大納言典侍なる人物であるが、作中の主要人物たちの系譜的な繋がりから見ると、冒頭での思い入れたっぷりのおかげにも重要な扱いかから見ると、冒頭での思い入れたっぷりのおかげにも重要な扱いかせられる。大納言典侍というからには、その父が大納言であったろうことは想像できるもの、その他の具体的な氏素性についての説明は、皆無なのである。その死の悲しみが、帝の退位にまで尾を引き、源中将をして、二人の間の娘（ヒロイン）を棄てさせてまで出家せしめる、といった具合に、深い関わりがあった二人の男の運命には重大な影響を及ぼしているものの、畢竟それだけのことなのだ。もっとも、ヒロインの運命については、薄幸の母大

納言典侍の運命を受け継ぐもののようにも見られているのであるが、別稿に述べたごとく、この物語の骨組みを成す系譜的な絡みかいらえば、ヒロインの悲運は、三位中將ともども、帥の宮家の血を引く者として実現しているものと見るべきであろう。謎解きの展開に著しい特徴をもつこの物語の謎の核をなすのは、冒頭、帝の深い哀惜を受けている大納言典侍をめぐる事情ではなく、その冒頭場面の最後で帝のひとりごとに出た「三位の中將」（6ウ）の正体であり、かれのバラバラになつた一族の行方が、物語の進行とともに明らかになってくるという仕組みなのである。七夕も過ぎたある夕べに、亡き大納言典侍を偲ぶ帝の傷心の姿は、所謂「狭衣型」の冒頭形式とも相俟って、すこぶる印象的であることは間違いない。が、当の帝の存在は、そこでの印象ほどの重さを担うものではない。がありえず、「狭衣型」の冒頭形式だからといって、『狭衣物語』の冒頭場面が物語全体の基調をすでにして暗示していたのと同列に扱ふようなことは、できない。率直に言って、冒頭場面での帝の大納言典侍追慕の筆づかいは、以下の物語の展開のための必要の程度を、はるかに越えるものといわざるをえないのである。物語の表舞台からほどなく退いてしまう人物（帝）に、物語の人物関係の中で孤立する、もう十数年も前に亡くなった人物（大納言典侍）を、いまさらのように追慕させるなどというのは、物語の論理として、ほとんど無駄なことであろう。ところが、その無駄が、よりによって冒頭に据えられているのだ。ということとは、それを描いた作者の中には、無駄とわかつていても、なお描かずにはいられない、何らかの事情でもあったのではないか。つまり、作者には、深い詠歎とともに帝に大納言典侍を偲ばせるといふことそれ自体に、物語の論理に優先

する意味があったのではないか、と忖度されるのである。

ここで、為家の経歴を辿って注目されるのは、かれに、後嵯峨院大納言典侍と呼ばれる、早世した娘のあった事実である。

為家の長女、後嵯峨院大納言典侍為子については、岩佐美代子氏の伝考が委細を尽くしている。定家晩年の鍾愛の孫娘であり、幼くより後嵯峨院に奉仕し、典侍として重んぜられたが、二条関白家の嫡男九条左大臣道良と結婚、家庭に入る。しかし、一女をもうけたのみで夫に先立たれ、自らも三十歳あまりの短い生涯を終えている。

この娘を失った折の為家の悲しみは、まことに深いものであった。題詠ばかりで、実生活に密着した詠作の乏しい為家の家集の中にあつて、この娘夫婦の死を悼む歌がともに見出される（『中院詠草』参照）のも、理由のないことではあるまい。もし、そのような悲嘆の中に物語執筆の心が動いたとすれば、物語の本筋には直接影響しない部分に、作者の生の感情がひそかに投入されてくるということも、ありえないではなからう。『浅茅が露』の冒頭のありかたが、かかる作者が為家の精神状態を反映するものとすれば、娘大納言典侍を思ふ自らの思いを、物語の帝に託したものと見て、その過度なまでに感傷的な筆づかいの由来も、説明しうることになる。

もっとも、大納言典侍なる呼称そのものは、格別めずらしいものでもなく、為家にたまたま早世した同名で呼ばれる愛娘がいたからといって、それをただちに『浅茅が露』の大納言典侍に引きつけて、為家作者説の傍証としようとするならば、いかにも牽強附会の誇りをまぬかれないところであらう。しかし、この『浅茅が露』には、娘大納言典侍を失った悲しみの中に父為家によって書かれたと見るのに

都合のよさそうな徴証が、なおいくつも見出せるようなのである。

#### 四 哀傷の発想と表現

岩佐氏によれば、大納言典侍を失った折の為家の哀傷歌は、都合五首を数えるのであるが、『浅茅が露』が同じ時期の創作にかかるとすれば、両者には類似の発想や措辞の現れることが期待されよう。まず、為家の歌を列挙すれば、以下のとおりである。

大納言典侍身まかりての比 建長七年

①あはれなどおなじ烟に立そはで のこる思ひの身をこがす覽

〔中院詠草〕一三番〔私家集大成 第4巻 中世II〕一九

七五年、明治書院 所収本、『統古今和歌集』卷十六・哀傷・

一四六一番、安井久善編著『藤原為家全歌集』一九六二年、武

蔵野書院。以下『全歌集』の略称を用いる。二〇九五番

人のとぶらひて侍し時

②とはれてもことの葉もなきかなしさを こたへがほにもちる涙

かな

〔中院詠草〕二四番、『井蛙抄』卷三「なにがほ」ノ項二「大

納言典侍早世時 為家」トシテ出ル 〔日本歌学大系 第五巻〕

二九五七年、風間書房 五二頁、『全歌集』二〇九六番

後嵯峨院大納言典侍、身まかりけるころ

為家卿

③いまは我まどろむ人にあつらへて 夢にだにこそきかまほしけれ

〔拾遺風体和歌集〕哀傷歌・二二八番 〔新編国歌大観 第六

卷 私撰集編Ⅱ(一九八八年、角川書店) 所収本、『全歌集』私二二八五番)

文永元年毎日一首中、七月の中四日夜 民部卿為家卿

④ともす火も手向くる水もまことあらば たまのありかをきくよしもがな

『夫木和歌抄』卷十九・雜一・火・七九一七番(『新編国歌大観 第二卷 私撰集編』(一九八四年、角川書店) 所収本)、『全歌集』私四一三番)

⑤かた見ぞとみればなみだのたきつせも なをながれそふ水くき  
のあと

『秋夢集』四五番(『私家集大成 第4巻 中世Ⅱ』所収本)

さて、④の歌から、岩佐氏は、次のように推論された。

七月十四日の盂蘭盆の夜、ともす火、手向ける水にすがって魂のありかを求める為家の心は、自らは悲しみに一睡もできぬまに、せめて他人の夢にでも典侍の消息を聞きたいと願う、前掲「いまは我」の歌(③の歌のこと——筆者注)と符節を合するが如くである。この悲痛な歌の詠まれた文永元(弘長四)年七月十四日夜こそ、亡き典侍の魂をまつる盆供養の夜ではないか。<sup>15)</sup>

また、同じく、かの女の家集について、

彼女の家集に与えられた「秋夢集」の命名から、その没した季節は秋であったかに思われる。(傍点ママ)

とされ、結局、典侍の死は、弘長三年(一二六三)秋の頃であらうといわれる。<sup>16)</sup> 為家、時に六十六歳である。

一方、『浅茅が露』の大納言典侍の死んだ時期は明示されていないのであるが、冒頭で帝が七夕の過ぎた頃に故人を偲んで退位を考えていることや、後文の高野の尼の話の中で、源中将が典侍の没した翌年の秋、八月十五夜に出家したと語っていることからすると、どうも秋のこととされているように思われる。この共通性に注目すると、起筆の一文に、

春過ぎ夏もたけしかば、七夕・彦星の心もとなく待ちわたる七日の宵も過ぎぬる頃、月さし出でて影すずしき夕暮の程に、上は、清涼殿にひとりたたずませ給ひて、あはれに御覧じめぐらす。<sup>17)</sup>

と叙する筆づかいは、④の歌に通う思いが色濃く滲み出ているようにも思われる。もちろん、物語においては、人の死を描くのに、好んで秋が用いられることも考慮に入れる必要がある(例えば、紫の上の死は、八月十四日である)が、やはり注意しておきたいところである。

また、右にもふれた高野の尼の話の中に、源中将と大納言典侍のことを語って、次のようにある。

女房は、朝夕にねをのみ泣きておぼしなげきしかども、御契りや深かりけん、ほどなく孕み給ひて、姫君ひとり生み給ひし、三つになり給ふ年、亡せ給ひにき。中将は、「同じ煙にも」としづみ給ひしかども、云々 (71オ)

「同じ煙にも」云々は、いうまでもなく、『源氏物語』「桐壺」巻の、母北の方、同じ煙にのぼりなむと、泣きこがれたまひて、云々<sup>18)</sup>

を踏まえた措辞であろう。そして、このことは、①の歌が、同じく右の「桐壺」巻の一節を踏まえたものであることと、軌を一にするのである。

ところで、娘大納言典侍に先立たれた老父為家が、悲嘆の中で自らの思いを表現するための拠り所としたのが、①の歌に見るごとく、『源氏物語』の世界であつたらしい。このことは、④の歌がやはり「桐壺」巻の、

たづねゆくまぼろしもがな つてにても魂のありかをそこと知るべく  
(1) 一一二頁

を踏んでいること、また、④と対をなすがとき③の歌が、おそらくは「幻」巻の、

大空をかよふまぼろし 夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ  
(4) 五三二頁

の歌と無関係でなさそうなことから、十分に考えられてよい。もちろん、愛する肉親の死にあつた者が、「桐壺」や「幻」巻を想起して、それを踏まえた哀傷歌を詠ずることは、『源氏物語』の浸透度からしても、特殊なことではないだろう。したがって、典侍の死を悼んで為家が『源氏物語』の世界を踏まえた哀傷歌を残していることと、『浅茅が露』の大納言典侍の死の記述に『源氏物語』の世界が重ねられていることは、偶然の一致と処理して問題のないところではある(例えば、『吾の衣』巻二には、

ゆめにだにまどろまれねばなき玉のありかほそことみぬぞかな  
しき  
(2)

なる哀傷歌が見えるが、これは「桐壺」「幻」両巻の歌を取り合わせ

たものであること、明白であろう)が、やはり興味を惹く事例ではある。

さらに、岩佐氏によって、典侍の残した歌巻の奥に為家が記したと推定された⑤の歌も、故人の遺墨を見出した肉親の抱く悲しみを率直に詠じたもので、多分に類型的ではあるが、これが、『浅茅が露』において、三位中将からヒロインの形見の品を手渡された中納言(二位中将)が、

まぎらはしたる色紙の手習・絵なんどの筆の流れ・墨つきま  
で、なべてにはありがたきさまなり。(中略) つくぐぐと見る  
に、涙は滝の音のやうにこぼれ給ひけり。(66 オ 66 ウ)

と描かれているのに似通っているのも、気になるところである。そして、⑤の歌も、おそらくは「幻」巻の、

いと、かからぬほどの事にてだに、過ぎにし人の跡と見るはあ  
はれなるを、まして、いとどかきくらし、それとも見分かれぬ  
まで降りおつる御涙の、水茎に流れそふを、云々(4) 五三三頁

という一節が念願にあつたものであろう。

こうして見てくると、五首中、②の歌を除いた四首が、愛する女に先立たれた悲しみを描くことにおいて首尾照応する『源氏物語』の「桐壺」「幻」両巻と関わりのあるものだということになり、為家が、桐壺更衣に先立たれた母のごとく、あるいは桐壺帝のごとく、また紫の上を失った光源氏のごとく、わが愛娘の死に直面した自らの姿を思い描いていたさまが、彷彿と泛んでくるようである。それにして、このような為家の悲しみを表現する際の拠り所が、『浅茅が露』での悲傷の描写に踏まえられたものと、かくも重なり合うところが多いというのは、どういふことなのであろうか。筆者には、

偶合というにはいささか近きにすぎざる両者の関係を説明するには、『浅茅が露』の作者も為家であったがゆえとするのが、最も自然であるように思われるのである。

## 五 『浅茅が露』における父と娘

ところで、『浅茅が露』が、為家によって、愛娘の死を契機に執筆されたとして、作中人物中、大納言典侍との関係とともに注意されるのが、ヒロインの運命である。

先にも触れたところであるが、ヒロインは、大納言典侍と源中将との間の娘である。かの女の辿った運命は、まことに過酷なものであったが、注意されるのは、一度死にかかったところを、実父の指示を受けた聖に助けられて蘇生した、という点である。これは、冒頭の大納言典侍への哀悼の記述の必要以上の詳細さが、為家の悲しみの情の直接的な反映だったとすれば、こちらは、現実にはかなわなかった思いを、物語に託した設定ではなかったろうか。

『浅茅が露』は、残念なことに、物語の結末部を逸しており、不確定な部分を残さざるをえないのだが、現存本終わり近く、いったんは死んだものと思われていたヒロインは、いとこにあたる三位中将に見出される。ヒロインを救った北山の聖の話によれば、師である書写山の聖が、掌中の玉を失う夢を見たため、北山の聖をして、野中に置かれた女人を救うべく指示したのだという。この書写山の聖が、ヒロインの実父であることは、物語を注意深く読めば、おのずと判るようになっていく。それにしても、こうした父と娘の因縁を、物語も最終間際になって強力に押し出してくるというのは、この作品の大きな特徴であるといつてよい。

総じて、この『浅茅が露』という物語は、その分量の割に、人物関係が錯綜し、話の焦点が一定しないとの印象が強い。物語の類型的なパターンを踏襲することの多い一方、その型のもつ面白さを十分に發揮しえないまま、思いがけない方向に逸れてしまうといった展開が、一再ならず見られるようである。この物語から、最もオーソドックスな物語の型を抽出するとすれば、二位中将とヒロインとの悲恋という、古物語以来のお定まりのパターンがまず目につくところであろう。ところが、ヒロインの死後、そうしたかたちとしての展開は、一気に失速してしまう。この後、悲嘆に沈む二位中将の姿でも追い続ければ、自然な展開も図れるのであるが、実際は、それまで脇役であった三位中将に、にわかにスポット・ライトが当てられ、かれの道心とからめて、その失われた母方の系譜の解き明かしといった趣を濃くしてくる。そして、そちらとの関わりから、意外なヒロインの再登場となるわけである。

思うに、散漫に見えるこの物語の展開も、結局は、悲惨な運命を辿り、死にまで到らんとするヒロインを、陰で見守っていた実父が助けるという、その局面に集約されてくるのではないか。そうすると、二位中将は、極端にいえば、ヒロインを追い詰める役割を担っているに過ぎないわけで、その死後にいっこう出家への傾斜が見られなかったのも、無理もない話であった。また、三位中将も、蘇生したヒロインを物語世界に再登場させるに恰好の人物として周到に設定されたものと見るべきようである。つまり、この物語は、恋愛物語としてのスタイルを徐々に喪失させ、親子の絆を高僧の法力譚に寄せてかたどるところに、最大の山場をおいたものごとくなるのである。



為家は、康元元年（一二五六）二月、五十九歳で出家した。かれの出家生活は、とうてい物語の書写山の聖のごときものではありえないが、娘を失った悲しみを、はかない夢想に託すとすれば、かかる人物たちの位置づけというものは、自然に発想されてくる底のものではなかつたらうか。

なお、物語の大納言典侍が嵯峨院大納言典侍に当たるとすれば、娘であるヒロインは、典侍が道良との間にもうけたひとり娘に擬することができる。この娘についても、岩佐氏の<sup>22</sup>『伝考』に詳しいが、氏の推測により生年を建長三年（一二五一）と仮定すると、母典侍の没した弘長三年（一二六三）当時十三歳、これは、ヒロインの初登場の際に、「十五六ばかりにやあらんとおぼゆる人」（26才）としているのと、かなり近い線である。ヒロインが、母を失い、父も行方不明ということで、孤児同様の身であるのも、その娘が、父、ついで母を相次いで失い、孤独な境遇となっていたのと相似る。為家は、この不憫な孫娘をも、母典侍同様鍾愛していたことが知られ、物語のヒロインのごとき悲惨な運命に孫娘が弄ばれることを願うはずはないのだが、その人物像の背後に、この孫娘の面影があったことも、考えられないではない。

## 六 おわりに

以上、物語『浅茅が露』の作者を藤原為家とする仮説の裏付けを求めて、物語の内容と為家の閨歴との相関に注目してみた。この想像が当たっているとすれば、『浅茅が露』の執筆は、弘長三年秋の大納言典侍没後ほどなくであろうということになる。これは、大槻修氏の成立時期の推定説とも抵触しないし、『風葉和歌集』成立以前と

いう条件をも満足させる。ちなみに、この前後の為家の作歌活動については、岩佐氏が、

為家の歌歴を見るに、文応期及び文永期は作歌活動が非常に活潑で、これにはさまれた弘長・三年は比較的低調である（『全歌集』解説）。為家はこの期までを一段落として家集を自撰したと考えられており、それは六十五六歳という年齢からしても妥当な推測であるが、その為家が六十七歳の弘長四（文永元）年初頭から、再び年齢に似ぬ驚くばかり精神的な作歌意欲をあらわに示して活躍をはじめるのは、一体何故であらうか。そこに弘長三年秋の典侍の死が介在し、その悲しみによる虚脱状態を自ら克服しようとする為家の精神的苦闘が、文永期の顕著な作歌実績となって実ったと解釈する事が、最も自然なのではなからうか。<sup>23</sup>

と述べておられる。すると、その「虚脱状態」の「克服」のためには、物語を書きすさんだことも、一役かっていたのかも知れない。紙幅の都合により、限られた観点からの相似の指摘に終始することとなったが、本稿で触れえなかつた物語の表現と為家の和歌との類似関係等、なお稿を継いで考えてゆきたいと思う。

（一九八八年十一月稿）

## 注

- (1) 佐藤恒雄「藤原為家の青年期と作品」(F)『中世文学研究』253号 一九七六年七月—一九七七年七月。
- (2) 注(1) 佐藤論文(F)二四頁。
- (3) 佐藤恒雄「藤原為家の初期の作品をめぐって——『千首』を中心に、後

代との関わりの側面から——」(『言語と文芸』11巻3号 一九六九年五月)四〇頁。

(4) 注(1) 佐藤論文(下)二五頁。

(5) 西尾光一・小林保治校注『古今著聞集下(新潮日本古典集成)』(一九八六年)四六頁。

(6) 寺本直彦著『源氏物語受容史論考』(一九七〇年、風間書房)後編・第四節「天福元年後堀河院御時の物語松」参照。

(7) 国書刊行会本『明月記』第三、三四〇頁。

(8) 伊井春樹著『源氏物語注釈史の研究 室町前期』(一九八〇年、桜楓社)付章第一「源氏物語研究史概説」一一四頁。

(9) 池田亀鑑著『源氏物語大成 巻七 研究資料篇』(一九五六年、中央公論社)所収本五三九頁。

(10) 水川喜夫著『飛鳥井雅有日記全釈』(一九八五年、風間書房)一四七頁。

(11) 注(1) 佐藤論文(下)二五頁。

(12) 大槻修著『あさちが露の研究』(一九七四年、桜楓社)研究編「登場人物について」。

(13) 拙稿「浅茅が露」管見——主題性と物語史的位置——」(『国語と国文学』63巻4号 一九八六年四月)。

(14) 岩佐美代子著『京極派歌人の研究』(一九七四年、笠間書院)第二章・第三節「九条左大臣女とその母後嵯峨院大納言典侍」。

(15) 注(14) 岩佐論文一六六頁。

(16) 注(14) 岩佐論文一六五頁。

(17) ①の詞書に「建長七年」と見えることについて、岩佐氏は誤写と判断されるが、佐藤氏は、その可能性も皆無ではないとされる(佐藤恒雄「御子左家領越部庄の三分とその行方」『中世文学研究』10号 一九八四年八月 一四六—一四七頁)。今は、岩佐説に従っておく。

(18) 『浅茅が露』の引用は、『あさちが露』在明の別(天理図書館善本叢書6)「(一九七)年、八木書店」により、適宜校訂を加えた。所出数・表裏を示す。

(19) 『源氏物語』の引用は、阿部秋生・秋山慶・今井源衛校注・訳『源氏物語』(日本古典文学全集12/17)「(一九七〇)一九七六年、小学館」により、所出冊数・ページ数を示した。

(20) 注(14) 岩佐論文に、「特に源氏物語桐壺更衣葬送の一節をふまえた第一作(①の歌のこと——筆者注)の措辞は」云々(二五六頁)との指摘がある。

(21) 拙稿「中世擬古物語研究への一視点——『浅茅が露』『増鏡』所見の類話のことなど——」(『文献探究』17号 一九八六年三月)に、すこし詳しく触れたところがあるので、参照されたい。

(22) 久曾神昇校『苔の衣下』(古典文庫八三冊)「(一九五四年)五二頁。

(23) 注(14) 岩佐論文一六八頁。

(24) 注(13) 拙稿では、散逸部分の内容を、三位中将と生母との再会を中心に、かなり多めに想定していたが、その後、鷲澤伸介「あさちが露」小考」(『芸文東海』8号 一九八六年十二月)により、根本的に見かたを改める必要が出てきた。全体的な作品世界の把握をも含めて、あらためて補正の機会を得たい。

(25) 神田龍身「鎌倉時代物語論序説——仮装、もしくは父子の物語——」(『日本文学』35巻12号 一九八六年十二月)に、既にし出して奔してしまっている父親と、残された娘というその関係

をベースにして物語全体を構成したものであるといえよう。(六五頁)

との指摘と分析がある。

(26) 注(14) 岩佐論文。

(27) 注(12) 大槻書研究編「あさちが露」と『浅茅原の尚侍』(その一)参照。

(28) 注(14) 岩佐論文一六七頁。

〔追記〕校了直前になって、豊島秀範氏の好論「浅茅が露」論——主題性を求めて——」(『弘学大語文』15号 一九八九年三月)に接した。本稿にその所説は参照できなかったが、共感するところ大であった。